

教育
相談室

カウンセラーの窓から

聴いてもらえる安心感

子どもが親にとってどんなに大切な存在であるか、子どもが何らかの問題を抱えてしまった時、改めて気がかされることがあります。担任の先生に「家庭での接し方を相談してみてもどうですか」とすすめられて、小学二年生のサキさん（仮名）の母親が相談室を訪れました。

先生からの電話で、サキさんが友だち（どちらかと言えばよく遊んでいる）にひどい言葉をあびせ、傷つけられた相手の子の家族から、双方の子どもを心配する声が寄せられたと知りました。連絡を受けた時、母親は「しまった」と思ったそうです。兄（中学生）に心配ごとがあつて、仕事から帰っても何かと掛かりつきりになっていました。宿題や学校の準備もさっさと済ませて遊びに行き、親の手を煩わすこともないサキさんのことは、後回しになっていたと母親は気付きました。

この親の支えがあればきつとサキさんは大丈夫と思つたものです。

「じっくり話を聴いてもらいたい」と、時には子どもを伴つて相談室を訪れる家族は、ここ十数年減ることはありません。話をするうちに何らかの気付きを得て、前に進めることがあります。

思春期真っ只中で、そつとしておいてほしい子もいるので個人差はありますが、幼児期はもろろんのこと、どの年齢においても、目を合わせて大人に話を聴いてもらい、かまってもらふ体験は、たくさんあつた方がいいのではないかと感じています。

霊長類学者の山極寿一さんによれば、人間にだけ白目があるのも、視線のわずかな動きをとらえて、相手の気持をよりつかめるように進化した結果だそうです。「うん、うん。そうなの」とひたすら子どもの方を見て、話を聴いてみてください。普段のリビングやお風呂

場などで十分です。我が子に何かつらいことがあつても、親の顔を見ると安心するという感情は、そういう日々のやりとりを通して育まれていくものではないでしょうか。


(T.S)

「はくみ」は、家庭のあり方についてみなさんと一緒に考えていきたいと発刊しております。子育てのヒントになればと思います。ご意見をお聞かせください。

鯖江市教育委員会教育政策・生涯学習課
TEL 5312256

「夕方見守り運動」にご協力を!

子どもの声掛け事案が発生しやすい夕方に、大人が誘い合つて、屋外で作業する、散歩などを心掛け地域ぐるみで子どもを守り育てる活動です。屋外で行うちょっとしたことを夕方に合わせて行うことが、地域の子どもの守る立派なボランティアになります。

<h4>自宅周辺での作業</h4> <p>自宅周辺の庭木の手入れ、掃除などは、できるだけ子どもの登下校の時間帯を見計らって行ってください。</p> 	<h4>散歩をする</h4> <p>犬の散歩などは、通学路や子どもたちの遊び場をコースに入れて子どもたちを見守ってください。</p> 
---	--

25周年記念号

はくみ

家庭教育を考えるシリーズ

発行
鯖江市教育委員会
鯖江市社会教育委員会
青少年健全育成鯖江市民会議

協力
丹南青少年愛護センター鯖江支所

あなたがいるから 私はしあわせ



神明幼稚園『つめたくて きもちいいねー』

鯖江東小学校『5.6年生はびねすダンス』



東陽中学校『修学旅行 クラスアピールタイムのひとこま』

河和田小学校『おいしいいたけ できるかな』

子を思う親の気持ちはみんな同じ。大丈夫。その思いはきっと子どもに伝わっていますよ。

子育てにパーフェクトは所詮ムリ、失敗は許されない、と思いつめないでほしい

少しぐらい手抜きしても子どもの才能は計り知れないものがあるので心配なし。お母さんか地に足をつけた子育てをやったらきっと子どもも落ちつくでしょう。(33号)

ねえねえ、聞いて聞いて

忙しくても、手を止めて、目を見て話を聞いてあげましょう。話を聞いてあげるたった3分の積み重ねが親子にとってかけがえない絆にきつとなることでしよう。(35号)

まずは、子どもの話をよく聞いてあげましょう。

「なるほど、そうだね」と「ほんとに、そうだったの」

どんな話もしっかり聞いて、まずうけとめることが子どもの心を安定させることにつながります。(33号)

愛情のシャワーをいっぱいかけて

一日一回でもいいので、子どもにスキンシップをして「あなたがいるから、私はしあわせ」と笑顔で言ってみてはいかがですか。子どもたちは、きっと「自分は愛されているんだ」と幸せな気分になるに違いないと思います。(44号)

「当たり前」の反対は、何でしょう

繰り返される日常の中で、私たちは、「子育てをしている」という大切なことを忘れがちです。いろいろなことを「当たり前」だと思っていたけれど、本当に「当たり前」なのでしょうか。「当たり前」の反対語は、「ありがたい」だそうです。(47号)

まるごと抱きしめて

どんなにやんちゃだろうと、口答えばかりする子だろうと、かわいいわが子にわかりありません。子どものよい面も悪い面も含めて、その子の存在そのものをまるごと認め、受け止め、抱きしめてやることを忘れてはならないと思います。(37号)

子育ては、急がないで

結果だけで褒めたり、しかったりしていませんか。結果が出なくても、子どもたちががんばったプロセスをしっかり褒めてあげましょう。また次のやる気につながります。(45号)

十人十色 どの色も美しい

われわれ大人の役割は、みずからの生き方を子どもたちに示すとともに、子どもの可能性を信じ、がんばっていることを褒め、自分がかげがえのない存在であることを自覚できるよう成長を見守ることです。(43号)

子どもの声を聴くということは子どもの苦しみや喜びを聴くということ

子どもが背負っている苦しみや喜びをそのまま受け入れることで、子どもの苦しみは半減し、喜びは二倍になります。(47号)

「～するな(禁止)ではなく「～しよう(導く)」に

子どもたちは否定されたと感じると、心を閉ざしてしまいます。子どもに考えさせ、選択させる中で、子どもは成長し自立していくものです。自立していこうとする子は、自分自身を大切にします。(43号)

わくわく生きる力

子どもたちが心地よい幼児期や年少期を過ごすほど、子どもたちの幸福感も高まるようです。人への信頼感も高まり、生きる意欲も育まれるといえます。そして、子どもたちが壁にぶつかり揺れ動いたときも、自然に立ち直れます。(38号)

時にはそっと見守ることも必要です。

子どもたちは聞いてもらえただけで、元気になっていくものです。(37号)

自分の思いが伝えられれば、自信がわいてくると思いますが、認められたい褒められたいことが、元気になる第一歩です。(38号)

せかさないで聞いてほしい

子ども自身、言葉でうまく言えなかつたりすることが多くあります。その子の気持ちを察するには、子どもをせかさない「心のゆとり」が私たちには必要だと感じています。(42号)

実感の伴う経験をたっぷり!!

アニメーションの中の水しぶき、スクリーンの中の水の冷たさではなく、本物にふれた感動が大切なのです。ぬくもりや、痛みや鼓動が伝わる経験をたくさんすることが、自分自身だけでなく、周りの人々を思いやる心を育てることになるのだと思います。(34号)

子どもに気づかせる、親はじっくり見守る

「子どもはもっとできるはず」「わかっているはずだ」という思い込みがあると、厳しい言葉が生まれてしまうようです。「やればできる」と子どもたちに自信を持たせたいものです。(39号)

毎年一回発行している「はぐくみ」は、平成三年の発行から数えて今年で26年目を迎えました。このたび、これを記念して「はぐくみ25周年記念号」を発刊することになりました。「はぐくみ」は、子育てについて「家庭づくり」から「親子の対話」「じわっと効いてくる話」を特集してきました。特別号を記念して、その一部を読み返し紹介します。おもしろいと感じたことから始めませんか？

「はぐくみ」は、みなさんの家庭教育に寄り添って 共に悩み 共に考えます。



ここに紹介した本文が掲載されている号を含め、「はぐくみ」は市のホームページからいつでもご覧いただけます。



「こんなときどういう言葉掛けをしてあげたらいいのかな」「読んだ時は関係ないと思ったけど、今もう一度しっかり読んでみたい」「こんなに叱ってばかりだけど大切な存在だと思っていること伝わっているかな」少しでも子育てに悩んだとき、「はぐくみ」をのぞきにきてください。何かの気づきやヒントになってくれると嬉しいです。

あなたがいるから 私はしあわせ

我が子として自分のもとにやってきてくれたその時に始まり、成長するに従って子育てから得られる感動、喜びはとても大きなものです。

「あなたがいるから、私はしあわせ」と感じる瞬間も数えきれません。

でも……子育ての毎日は、とても忙しく、思い通りにならないことも多いもの。どの子もみんな一人一人違って、子育てに迷い、悩むこともしょっちゅうです。いつも「しあわせ」とは感じられない……という日も多いでしょう。

「ママ」という生物は、他のほ乳類と違って、一人前の大人として自立するまでに長い時間がかかる動物です。だから、進化の過程で、母親だけでなく、父親や祖父母、その他の家族、近くでいっしょに生活している家族以外の「ママ」と、共同で子育てをするようになったのだそうです。

子育ては、みんなぞ。

困ったことも、迷ったことも、悩みも、

いろいろな人たちの「手」や「目」や「言葉」、「知恵」に頼りましょう。

そしてみんなで、「しあわせ」を共有しましょう。

私たちも しあわせ



急な病気のと
きどか、いつ
でも頼ってね。
甘えてくれて
らさぬ。

〇〇ちゃん、
とってもいい
挨拶してくれ
るよ。

そっぴい
うとき
にはね
……

ボランティア
に来たときに
は、とてもよ
く働いてたよ。

わかる、
わかるー！
うちの子お
んなじだったよ。

大丈夫！
まだ見守って
いればらよ。

叱るのも
ほめるのも
むずかしい
よね。

こんなサークル
もありますよ。
お子さんといっ
しょに行ってみ
たら？

よくわから
ないね。
不安だから、
先生にきい
てみようか。



涓滴

叱る「し」と褒める「よし」や、
聴く「き」と

叱る「し」と褒める「よし」や、聴く「き」と

褒めて、子育てが困難になった例はほとんどもありません。むしろ、多くの子どもたちは、あまり褒めてもらっていないと感じているようです。子どものよいところや成長したところを褒めるのです。子ども自身の自己肯定感を培うことにもなります。できる限り真剣に褒めたいものです。そうしないと、何でも褒められていると思われ、逆に子ども自身も、「ほかにされているのかな」「うちも低くみられているのかな」と思ってしまうかも。

しかし、何といっても難しいのは叱ることです。今は、学校でも家庭でも、あまり叱られることは少ないです。叱られたことがないから、大きな壁にぶち当たると、挫折してしまう場合もあります。厳しい言葉を言っていないと思われるのに、子どもの中にショックを受けてしまう子さえいます。近所の子を叱ると、「家でも、叱ったことがないのに、何を言ったのだ」とクレームをえます。叱ることは難しいものです。どうしたらよいのか悩むか。

一つの解決法は、「傾聴」です。子どもの言葉に耳を傾けることです。褒めたとき、子どもの表情を見ます。子ども自身は、もっと頑張り足りないと感じているのかも知れないからです。叱るときも同じです。必要以上に、子ども自身が自分を責める場合があります。だから、褒めたり叱ったりする前に、「どうして、そうしたのかな」と聞いてみてください。子どもの声を聞きながら、褒めたり叱ったりしたら、子どもの受け止め方も変わるはずです。子どもが「聞いてもらえた」と実感したとき、褒めることや叱ることが「じわわり」子どもの心に効いていくようになります。

「涓滴」とは「しずく」という意味。しずくも集まれば、やがて大河となることの願いを込めて。